

敷地認識におけるハイパーテキスト性に関する研究*

A Study on Hyper-textual Structure of Site Cognitions*

山田圭二郎**・田中尚人***・永末卓司****

By Keijiro YAMADA**・Naoto TANAKA***・Takuji NAGASUE****

1. はじめに

(1) 研究の目的

現代の都市は高度に発展した技術を背景にインフラストラクチャの整備が進み、その恩恵は都市のあらゆるレベルにまで均質に浸透した。一方で、古来より都市の奥深く、そして我々の精神にまで深く浸透し、大地に根差して生活する人々の景観のリアリティを確保してきた地形・山水の面影は逆に、いつしか我々の意識から遠退いてしまった。これは都市発展の過程において、「物のすがた・かたち」に対する意識が設計・計画の実務において等閑視されがちであったことがその一因と考えられる。

そこで本研究では「空間認識論」及び「日本の伝統的空間手法」に関する既往研究(1.(3)参照)を参照・発展させながら、日本の伝統的空間の典型である山裾型敷地における空間認識を抽出・分析し、それらに対応する空間デザイン手法を紐解くことにより、今後の設計・計画にそれらを活かすべく山裾型敷地における空間特性及び空間認識特性を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の対象

本研究では、筆者らの既往研究¹⁾を参考に、京都盆地山裾に占地する寺院から、可能な限り地形特性・宗派・創建時代等の異なる寺院敷地23カ所を選定した。作図は、25,000分の1地形図及び2,500分の1地形図をもとに現地踏査及び補測を行い、これに基づき各敷地の平面図・断面図を作成した。

*キーワード：敷地，空間認識，ハイパーテキスト

**正員，博士（工学），セントラルコンサルタント株式会社

（東京都大田区南蒲田2-16-2，

TEL：03-5703-6171，kyamada@central-con.co.jp）

***正員，博士（工学），岐阜大学工学部社会基盤工学科

（岐阜市柳戸1-1，

TEL:058-293-2447，naotot@cc.gifu-u.ac.jp）

****非会員，修士（工学），東京三菱銀行

(3) 研究の位置付け

「空間デザイン手法」と「空間認識」とは表裏一体の関係にあるが、これらの関連する既往研究には「関係性」に着目しているものが多く見受けられる。空間認識論については、先駆者であるK・リンチ²⁾が要素間の相互関係を重視し都市の骨格構造を示す認知地図なるものを提案した。また、G・カレン³⁾は都市を実体よりもむしろ関係の集積・集合体と捉え、その関係を取り結ぶ技法「環境の技法」を提唱した。C・アレグザンダー⁴⁾や志水⁵⁾は想起イメージの「ツリー構造」や「セミラティス構造」(図-1)を示し、柳川⁶⁾や萩下⁷⁾は「ハイパーテキスト構造」(図-2)を空間認識構造として示唆している。

我々日本人の景観認識にはG・カレンの言う実体験による個々の具体的視覚像やそれに深く関連する意味からなる無数の断片的イメージのダイナミックな展開があり、そこには意図的な空間デザインが巧妙に仕込まれているはずである。しかし、日本の空間の奥性や重層性、非実体性等が指摘されながら^{8), 9), 10)}、それが実体として捉えにくいために空間的分析・説明が十分にされてこなかった。かといって、それを空間認識という意識レベルにおいて捉え直すという試みもされていない。本研究はその端緒をなし、地形やインフラといった都市の文脈から極部分的なディテールデザインまでを、一連の文脈のもとに体系的・有機的に結び付けて捉えなおすことを目指す研究の一部をなすものとした。

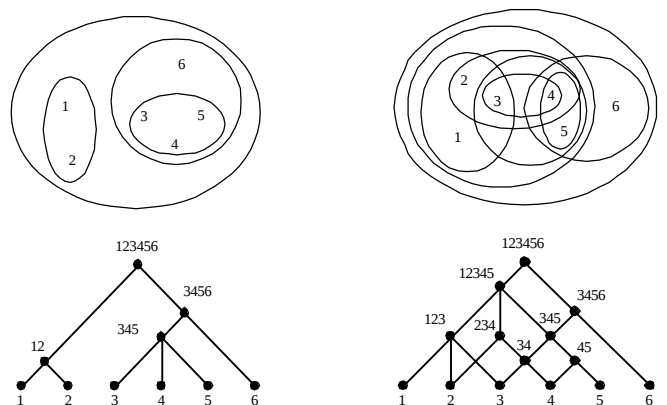
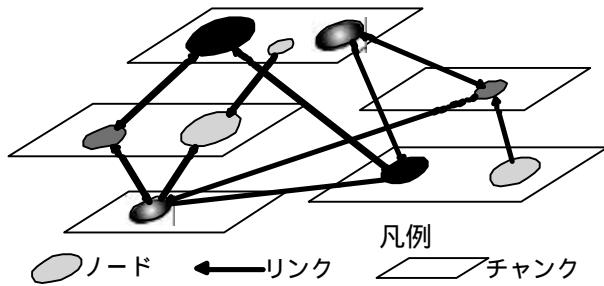


図-1 ツリー構造(左)とセミラティス構造(右)



図—2 ハイパーテキスト構造

本研究ではこの断片的なイメージや意味の連関構造そのものに着目し、空間と認識連関における一次的なつながりを幅広く抽出することを目的とする。また関係性を表すイメージ構造としては、自由度の高い構造である「ハイパーテキスト構造」が適していると考える。

2. ハイパーテキスト的解釈による空間認識モデル

(1) ハイパーテキスト構造

「ハイパーテキスト」を最初に定義した Ted Nelson¹¹⁾は、物語の書き手にとっても読み手にとっても線形構造として並んだ情報をそのまま時系列的に頭で組み立てていくわけではないという事実から、本を読む行為をより本を理解するという行為に近づけるために「ハイパーテキスト」構造なるものを考え出した。

線状性を持つ書籍などと比べるとインターネットなどで見られる「ハイパーテキスト構造」の特徴は、(1)任意性、(2)不連続性・可逆性、(3)多層性の3つに集約出来る。情報群の中に確たる序列はなく、見る者が自分の意志によって行き先を選び情報を消化する、これが「不連続性・可逆性」であり「任意性」である。またweb上では1つのウィンドウにいくつかのリンクが貼られており、どのリンクを選ぶかによって全く異なるウィンドウへと辿り着き、各々の情報は独立して振る舞うこともあれば情報群(ウィンドウ)の中の一要素としての役割を担うこともある。これが「多層性」である。

(2) 空間認識と空間体験

「ハイパーテキスト」は本を読む行為と本を理解する行為の違いを埋めるべく考案されたものであるが、この関係は「空間体験」と「空間認識」にも当てはめることが出来る。一つの視対象・視線・視点場によって成り立つ「空間体験」に対し、「空間認識」とは1つもしくは複数の「空間体験」によってなされるものである。よって空間認識を「ハイパーテキスト的」に解釈するには、この視対象・視線・視点場の

関係を多様化したものを考えればよい。

(3) 空間認識モデル

本研究では「ハイパーテキスト」の特徴に留意し、視点場・視対象・イメージの関係性のバリエーションを丹念に分析することにより17型の空間認識モデルが出来た(表-1)。またこれらは性質の違いから次の3つの系に分類出来る。まず一つの視点場・視対象から想起されるイメージがどのようなものであるか、そのリンクの性格に着目した空間認識が「引用系」、時系列的なリンクの繋がりを前提に一連のリンク群に着目した空間認識が「継起系」、一つの視対象におけるリンクの多層性に着目した空間認識が「多義系」と分類した。

表—1 空間認識モデル

引用系	テキスト引用型		多義系	多像並列型
	連想型	見立て型		範列型
		隠喩型		自己投影型
		提喩型		縁型
	遠景引用型			入れ子型
継起系	多像直列型	単列型		絞り型
		パノラマ型		うつろひ型
		ランドマーク型		
	相互参照型			
	奥型			

3. 空間デザイン手法の分析

本章では実際の山裾型敷地の空間デザイン手法を分析することにより、前章で提示した空間認識モデルの妥当性を検証し、各デザイン手法の関係性を抽出することを目的とする。

(1) 分析の対象

本節では空間デザイン手法の分析対象と分析方法について記す。まず分析対象は1(2)で述べた研究の対象と合致する。続いて分析方法は、著者が行った現地踏査での経験を中心に、各文献を参考材料としてまとめた。ここで著者個人の独断による部分が大きくなることを防ぐため、考えられ得る限りの空間演出を列举することを本旨としている。以上をまとめたのが表-2である。

以下引用系「連想型(見立て型・提喩型)」、「遠景引用型」、継起系「奥型」、多義系「自己投影型」について記述する。

(2) 空間デザイン

(a) 引用系

写真-1は正伝寺・本堂からの写真である。枯山水の庭園が

表—2 空間認識モデルのデザイン手法と関係性

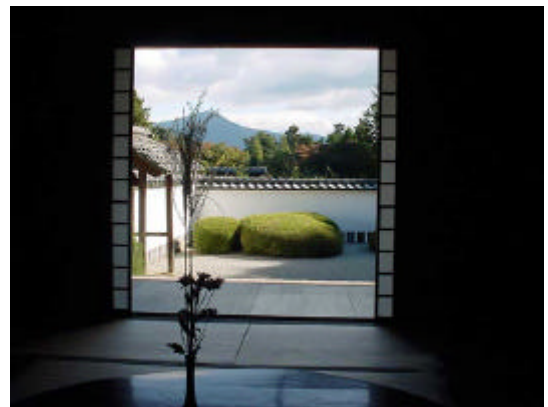
空間認識モデル		デザイン手法例	関係性	内容
引用系	テキスト引用型	-	視対象と引用されたテキスト	空間に関連したテキスト（由緒・謄等）の想起
	連想型	見立て型	枯山水、名付け	視対象と連想されたもの
		隠喩型	庭園、坪庭	視対象と連想されたもの
		提喩型	生花、盆栽	視対象と連想されたもの
	遠景借景型		借景、倒景（映し） 縮景（写し）	視点場と見切り線や反映させる要素と遠景 物理的に隔たった空間を視覚的要素として引用（借景、倒景） 国土スケールの各地の名所を縮約（縮景＝うつし＝写し）
継起系	直列多像型	単列型	-	結界要素を挟んだ前後の空間
		パノラマ型	見晴らし場	今いる空間と各視覚像
		ランドマーク型	塔状構造物	視対象と各々の画像を得た空間
	相互参照型		2つの視点場・視対象	視対象・視点場になりうる両空間 「見る・見られる」の相互関係（清水寺舞台・奥院等）
	奥型		折曲り、透かし、見越し、結界、陰翳等	今いる空間と先の空間 直接見せず、奥に何かがあるように思わせる仕掛け（気配） 全容を見せず、完全には隠さず、垣間見せる（透かし）
多義系	多像並列型	男坂・女坂	複数の参道	同一目的地に対する異種アプローチ空間の並列
	範列型	-	同じ範列に含まれるもの	共通の風景観賞形式（八十八景等）、類似表現形式（庭園等）
	自己投影型	点景	今いる空間と点景となる要素	仮想的空間体験
	縁型	結界、庇、縁、柱	性質の違う2つの空間	二つの異なる空間の相互浸透
	入れ子型	建築物	視点場と視対象の内部	外部空間から内部空間への連関
	絞り型	門、要素群	物理的要素と切り取られた像	物理的枠（門、窓等）による枠取り 要素のまとまり、明暗等による意識の絞り
	うつろひ型（異化）		-	通常時の画像と時が変化した画像 季節・時のうつろい コンテキスト置換

あり、塀を見切り線として比叡山が借景され、さらに方丈内には花が生けてある。枯山水は自然風景式庭園を抽象化して山水を表した庭園であり、これは連想型（見立て型）認識の具体的なデザイン手法と言える。また方丈内の生花はもともと山の一部と考えることが出来、その姿からは山水を連想させる。よってこれは連想型（提喩型）認識の具体的デザイン手法と言える。庭園や山水画に見られる“残山剩水”と呼ばれる手法等も提喩型のデザイン手法の一例であろう。

最後に空間的に不連続な比叡山を正伝寺庭園空間へ引用するいわゆる借景（いけどり）と言われる手法であるが、これは遠景引用型認識の例である。日本人はこのように「山水・自然」に至る所に引用し、常に身近にその存在を感じられるようにデザインしている。これは日本人の山への偏愛性の表れである。また「関係性」としては、枯山水と自然、生花と自然、庭園空間と比叡山がリンクされている。

（b）継起系

写真-2は法然院南門前の石段である。高低差を集約した石段に樹木が覆い被さり、明暗を強調することによって「奥性」を強く感じさせる。「奥性」は日本人固有の感覚であり、それゆえに日本の空間には至る所で「奥性」を演出している。その先に何かがあるかよりむしろ、その先に何かがあると思わせる、そのプロセスが「奥性」の魅力である。「関係性」としては、今いる空間と「奥性」を感じる先の空間がリンクされている。



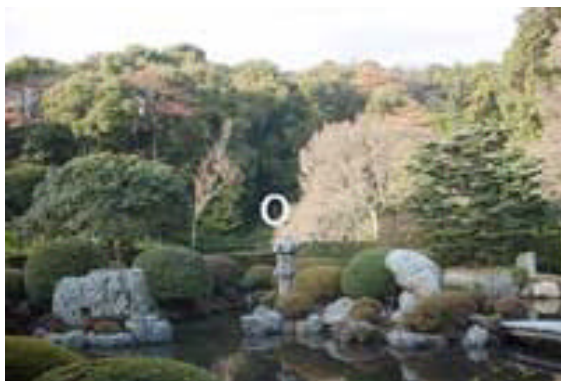
写真—1 正伝寺方丈



写真—2 法然院参道

（c）多義系

写真-3と図-3は清水寺成就院の庭園写真と断面図である。庭園敷地のさらに奥、高台寺山の中腹に石灯籠があるのが確認出来る。この石灯籠へ向かうことは物理的に不可能だが、



写真—3 清水寺成就院



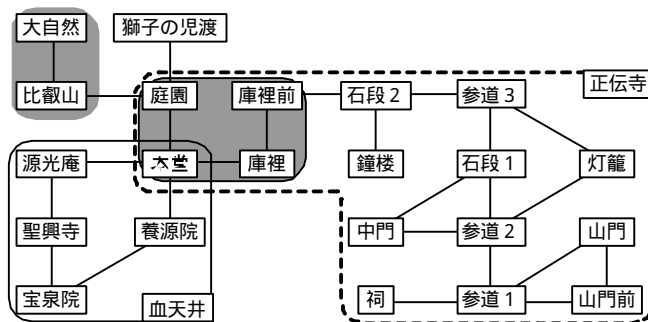
図—3 清水寺成就院断面図

庭園内から石灯籠が見えることでそこに行きたくなくなったり石灯籠付近における空間体験を想像したりする（仮想的空間体験）。このような点景は自己投影型認識の具体的デザイン手法である。現代では親水象徴という言葉があるが、それも点景の一つである。関係性としては、視点場である庭園と点景である石灯籠がリンクされる。

以上「連想型（見立て型・提喻型）」、「遠景引用型」継起系「奥型」、多義系「自己投影型」については具体的デザイン手法を挙げ、その妥当性を実証したとともに関係性を明らかにすることが出来た。他は表-2 に示した通りである。

4. 山裾型敷地におけるハイパーテキスト性の検証

本章では、前章で抽出した各空間デザインの関係性を用いて山裾型敷地が全体としてどのように空間認知されているか、どのようにハイパーテキスト性を有しているかを検証した。各寺院について敷地周辺を含めた小縮尺図面と敷地平面図にそれらの関係性を書き込み、その関係性と要素もしくは空間のみを模式的に表したのが図-4 である。鑑賞者の意識の中で空間や要素が複雑に関連し合っていることがよく分かり、この認識構造は「ハイパーテキスト構造」とと言える。



図—4 正伝寺連関図

5. 結論

本研究では、「ハイパーテキスト性」を有した個々の空間デザイン手法・空間認識が敷地の至る所に存在・出現することで、山裾型敷地の認識構造は「ハイパーテキスト性」を持つことを明らかにした。「ハイパーテキスト性」は一つの概念であるが、ルネッサンス期に絵画の世界から飛び出し空間デザインの世界へと取り入れられた「遠近法」と同じく、コンピューターの世界から端を発して今後新たな「デザイン理念」になる可能性を持っている。

この理念をどのように実務に反映させていくかは今後の課題であるが、我々日本人は古来より関係性のデザインに優れていて、今後ハイパーテキスト的な多様な空間認識を担保する多様な関係性・仕掛けを空間に織り込むことで、より豊かで深みのある空間を設計することが出来るであろう。

参考文献

- 1) 山口一人・山田圭二郎・中村良夫：山裾寺院敷地の地形論的占地特性に関する研究，土木計画学研究・講演集，No.23(2)，pp.597-600，2000.
- 2) Lynch, K: The Image of the City, MIT Press, 1960. [丹下健三・富田玲子訳，都市のイメージ，岩波書店，1968.]
- 3) G, Cullen: TOWNSCAPE, London: Architectural Press, 1971. [北原理雄訳，都市の景観，鹿島出版会 SD 選書，1975.]
- 4) C・アレグザンダー：「パタン・ランゲージ」，鹿島出版会，1983.
- 5) 志水英樹：「街のイメージ構造」，技報堂，1978.
- 6) 柳川正宏：「複合表象としての都市景観に関する研究」，東京工業大学大学院総合理工学研究科社会開発工学専攻修士論文，1995.
- 7) 萩下敬雄・山田圭二郎・中村良夫：景観認識における意識の連関と生成に関する基礎的研究，土木計画学研究・論文集 Vol.17，pp.541-546，2000.
- 8) 都市デザイン研究体：日本の都市空間，章国社，1968.
- 9) 横文彦：見えがくれする都市，鹿島出版会 SD 選書，1980.
- 10) 芦原義信：隠れた秩序，中央公論社，1986.
- 11) J, Nielsen 著・齋藤孝訳：Hyper Text & Hyper Media - コンピューター科学のニュー・パラダイム - ，HBJ 出版局，1991.